

明治時代におけるシェイクスピア受容の側面：
外国人教員の果たした役割

佐々木隆

プロローグ

日本におけるシェイクスピアを考える際、その初期は幕末のいわゆる紹介と明治初期の移入期では大きな違いがある。さらに教育制度が整備されるとシェイクスピアを学ぶというよりは、西欧文化を学ぶ、あるいは英語を通して西欧文化を学ぶ過程の中でシェイクスピアに触れることになる。この時、外国人教員の果たした役割を無視するわけにはいかない。本稿では、明治期の高等教育における外国人教員について注目する。

1 移入期の設定

シェイクスピアの移入期は広い意味でとらえると、『英文鑑』に始まるシェイクスピアの紹介からなるため、広くは設定区分として江戸時代も含むことになるが、明治時代の移入期の設定について確認しておきたい。

明治時代におけるシェイクスピアを考える時、移入期という区分を便宜的に設けることが多い。これは1883年にシェイクスピアの原文からの翻訳が発表された年をひとつの区切りとし、1883年以前は断片的なシェイクスピアの紹介及び作品の紹介が主流となっているからである。明治という新しい時代を迎えると、シェイクスピアは様々な文献の中に登場することになる。

徳川時代から明治初年へかけての Shakespeare 研究は、極めて幼稚なもので、既に明治八年(1875)頃には、一二の Shakespeare 崇拜

者があり、同十年(1877)頃には東京大学で Shakespeare 講義が開始せられて、稍見るべきものが出て来たとは言へ、然しそれらは単なる梗概か翻譯、或は抄譯、或は Lamb のものに過ぎず、眞の Shakespeare とは餘程隔たりのあるものであつた。⁽¹⁾

シェイクスピアという人物だけではなく、作品や台詞などが紹介される段階に入るのである。

明治期の外国文学の移入は西南戦争以後からようやく本格的になるが、イギリス文学ではシェイクスピアとリットン卿 (E.G.Bulwer-Lytton, 1803-73) のものももっとも多く紹介されている。しかし、この時代の外国文学は西洋の人々の人情・風俗・習慣紹介の段階に過ぎなかった。そのため、『ハムレット』移入もチャールズ・ラム(Charles Lamb, 1775-73) の『シェイクスピア物語』(*Tales from Shakespeare*, 1807) からの荒筋紹介程度で、そのほかは海外の觀劇記などにとどまっていた。たとえば一八七九年の滑稽雑誌『驢尾団子』には「新約繁昌記」と題した記事にニューヨーク上演の『ハムレット』の見聞録がある。⁽²⁾

これまでの受容史研究におけるこの「移入期」の区分については概ね「翻譯」のところが大きな区切りとなっている。Toyoda Minoru. *Shakespeare in Japan* (1940) の“The Gradual Approach to Shakespeare”では江戸時代から乾立夫編／中原淳蔵訳『泰西名士鑑』(上編)(1880)、『伊勢古事記日曜叢誌』(第17号、1880)までがおもに取り上げられ、“‘A Book of New Poetry’, and Some Early Foreign Professors of English Literature”では井上哲次郎撰『新体詩抄』(1882)と外国人教師の役割を取り上げた。“Direct Translation of Shakespeare: I”においてはシェイクスピアの原文から河島敬蔵訳

『欧州戯曲ジュリアス・シーザルの劇』（『日本立憲政党新聞』1883年2月27日～4月11日）以後を取り上げている。こうした章立てはその後の受容史研究に大きな影響を与えた。基本的にはシェイクスピアの紹介、ラムの『シェイクスピア物語』からの紹介、シェイクスピアの原文からの翻訳という時期で区分されている。

日高八郎「シェイクスピアと日本」（日本シェイクスピア協会編『シェイクスピア案内』1964）の論文構成は「1883年まで」「翻訳」「上演」「研究」である。1883年をひとつの区切りとしている。

Niki Hisae. *Shakespare in Japanese Culture* (1984) の“History of Shakespeare Translation in Japan”では“four distinct stages”の、“the first period”として“the early Meiji era (c.1870-1890)”としている。扱いは翻訳史の流れの中で次のように記しているに過ぎない。

The ground was also fairly well-prepared for serious direct translations of Shakespeare's plays. Kawashima Keizō a new phase by publishing his complete direct translation of *Julius Caesar* in 1883. ⁽³⁾

Kawachi Yoshiko“Shakespeare in Japan”（1989）では章分けはしていないが、論文では“a short biography of Shakespeare”“*The Japan Punch, Kyōniku no Kishō, Sakuradoki Zeni no Yononaka*”“free adaptations based on Shakespearean plots or on Charles and Mary Lamb's *Tale from Shakespeare*”“Shintaishi-shō”と触れたあとに河島について言及している。

In 1883, Keizō Kawashima translated *Julius Caesar* for a newspaper that was published for the political purpose⁽⁴⁾

特に、移入期との捉え方はしていない。しかし、日本のシェイクスピアを考える際に翻訳をまず考えなくてはならないだろう。

南隆太「シェイクスピアと日本」(日本シェイクスピア協会編『新編シェイクスピア案内』2007)では「3 シェイクスピアを移入する」では次のような記述がある。

1883年2月には本邦初のシェイクスピア劇の完全訳である河島敬蔵の『欧州戯曲ジュリアス・シーザルの劇』が『日本立憲政
党新聞』に連載され、、、⁽⁵⁾

杉木良明「シェイクスピアと日本」(河合祥一郎・小林章夫編『シェイクスピアハンドブック』2010)では、小見出しに「翻案の時代から本格的翻訳の時代へ」とあるが、河島敬蔵『欧州戯曲ジュリアス・シーザルの劇』については言及すらなく、本邦初の翻訳として坪内逍遙『該撒奇談—自由太刀餘波鋭鋒』(1884)が紹介されている。これは単行本としての翻訳本の出版ということになろう。

この移入期の設定については河島敬蔵『欧州戯曲ジュリアス・シーザルの劇』(1883)を取り上げているものの、日高八郎のよう
にかなりはっきりとした区分をしているものは少なくなっている。

(2) シェイクスピア受容の多様性

明治時代のシェイクスピア受容の捉え方は様々であるが、Toyoda

Minoru. *Shakespeare in Japan* (1935)では、新体詩、外国人教師に注目していることが特徴である。日本が西洋化していく過程の中で、高等教育を受けていく中で外国人教師によりシェイクスピアが紹介されていく過程も見逃せないところである。

川戸道昭(b.1948)が述べているように明治期のシェイクスピア受容の特徴のひとつはその多様性にある。

シェイクスピアの作品を受け入れた人々の多様性を反映するものであった。彼の作品の読者や観客は必ずしも文学趣味の人たちばかりとはかぎらない。商業、農業、工業、あらゆる分野の人々がこの西洋の劇聖の作品と取り組んだ。ただ単に知的なエリートばかりではない。ごくありふれた市井の民までもが、シェイクスピアの歌舞伎仕立ての芝居を見物したり、その「言行」をひもといて自己の精神修養の手本にしようと試みた。⁽⁶⁾

川戸は明治期のシェイクスピアの受容の多様性を『明治のシェイクスピア』(2004)の中で5つの視点から捉えた。その概要は以下の通りである。

- 1 江戸の戯作文学から翻案に改作されていく状況と文化的背景を探る。仮名垣魯文に注目する。
- 2 今まで顧みられることがなかった慶應義塾出身の啓蒙家によるシェイクスピアの紹介に光と当てる。
- 3 シェイクスピアの言行を孔子や孟子の言葉と並べて、精神修養の手本となそうとする処世訓的解釈の流れを追う。
- 4 藤村操という明治の知的エリートの自死を取り上げる。
- 5 シェイクスピアと明治の英語教育の問題を取り上げる。⁽⁷⁾

本稿でもこうした豊田実や川戸道昭の視点を踏まえながらも、川戸の指摘する5点目の英語教育には当然、外国人教員の果たす役割が含まれるものとする。

3 移入期

(1) 高等教育とシェイクスピア

川戸道昭『明治のシェイクスピア』(2004)によれば、明治前半の文学活動の特徴は学校教育と密接な関係にあり、とりわけ高等教育機関では西洋文学に関する講義が充実しており、中でも東京開成学校・東京大学はその代表である。⁽⁸⁾ まず、東京開成学校・東京大学の沿革の一部を東京大学のホームページより見ておきたい。なお、元号を西暦表記に直した。

沿革略図⁽⁹⁾

- 1684年 (天文方)
- 1797年 昌平坂学問所 (昌平黉)
- 1811年 蛮書和解御用
- 1855年 洋学所
- 1857年 蕃書調所
- 1858年 種痘所
- 1861年 西洋医学所
- 1862年 洋書調所
- 1863年 医学所、開成所
- 1868年 軍陣病院、昌平学校、医学校、開成学校
- 1869年 医学校兼病院、大学校、大学南校、大学東校
- 1974年 東京開成学校
- 1877年 東京大学 (法理文・医)

- 1886年 帝国大学令公布（法・医・工・文・理の5文科大学）
及び大学院を設置）
- 1887年 学位令公布
- 1888年 初めて博士号を授与（法学・医学・工学・文学・理学各5名）
- 1897年 京都帝国大学の創設に伴い、帝国大学を東京帝国大学と改称

東京大学の起源は、一般的には1684年に江戸幕府が設立した天文方、1797年に設立された昌平坂学問所、1858年に江戸の医者のお玉ヶ池種痘所となろう。外国語関係の変遷を見てゆけば、天文方は1857年に蕃書調所、1862年に洋書調所、1863年に開成所と変遷したが、当時はオランダ語が主流であったが、フェートン号事件（1808）以後英語への関心が急速に高まった。明治維新後は旧幕府の直轄下にあった昌平坂学問所・開成所・西洋医学所の3校は、1868年にそれぞれ昌平学校・開成学校・医学校として復興し、その後の組織的な改編後、1877年4月12日に、東京開成学校と東京医学校が合併して、日本で最初の大学「東京大学」が誕生した。1886年には帝国大学令の公布により、東京大学は「帝国大学」に改称されることになったが、1897年には京都帝国大学の設立に伴い東京帝国大学となった。つまり、近代化と西欧化を目指した明治政府のイデオロギーを具現化する「社会・文化的コンテクスト」として英文学を日本が受容する上で重要な役割を果たしたのがこの東京帝国大学に英文科を設置したということになろう。⁽¹⁰⁾

東大の前身の組織は外圧の強い影響を受けて設立されたと言っても過言ではない。特に、フェートン号事件(1808)、ペリー浦賀来航(1853)が大きな契機となり、当時の政権を担っていた徳川幕府が

英語への意識を高めたことが伺える。

1887年に学位令が公布されると、1888年には25名の博士が誕生した。その一覧は次の通りである。⁽¹¹⁾

文学博士

加藤弘之、重野安繹、外山正一、小中村清矩、島田重禮

法学博士

箕作麟祥、鳩山和夫、穂積陳重、菊地武夫、田尻稻次郎

医学博士

池田謙斎、橋本綱常、高木兼寛、三宅秀、大澤謙二

理学博士

矢田部良吉、伊藤圭介、菊池大麓、山川健次郎、長井長義

工学博士

松本荘一郎、古市公威、原口要、長谷川芳之助、志田林三郎

中でも外山正一(1848-1900)と矢田部良吉(1851-1899)は新体詩におけるシェイクスピア翻訳を通じた受容には欠かせない人物として登場する。ちなみに、『新体詩抄』(1882)を外山と矢田部と共に編んだ井上哲次郎(1856-1944)は欧米哲学を多く日本に紹介したことで知られている。必ずしも文学分野の学者だけがシェイクスピアに取り組んでいたのではないことがわかる。

(2) 外国人教員

日本英学史において外国人教員の役割について大きく取り上げ

ているものに Toyoda Minoru. *Shakespeare in Japan* (1940)、重久篤太郎『日本近世英学史』(1941)、川戸道昭『明治のシェイクスピア』(2004)がある。特に、Toyoda Minoru. *Shakespeare in Japan* (1940)においてシェイクスピア受容史における高等教育の果たした役割に注目していることはここで紹介しておかなければならないだろう。Chapter IIで“‘A Book of New Poetry’, and Some Early Foreign Professors’”として取り上げられている。

Something should be said about the early teaching of English literature in Japan, which has a bearing on Shakespearian studies. In the early years of the Meiji era this work was naturally in the hands of English and American scholars, to whose instruction and stimulus were largely due the new poetics and the growing appreciation of Shakespeare and other English authors. ⁽¹²⁾

重久篤太郎『日本近世英学史』(1941)でも次のように指摘されている。

明治初期の学術研究、殊に英学研究に於ては東京大学及びその前身の諸学校がその主要なる役割を演じたのであるが、これらの教育機関に所謂御備教師・講師として英語・英文学を講じてわが国のこの方面の研究に多大の寄與をなした外国人教師の功績も忘れてはならない。⁽¹³⁾

Toyoda はエドワード・ハウード・ハウス(Edward Howard House, 1836-1901)、ジェームズ・サマーズ(James Summers, 1828-1891)、ウィリアム・A・ホートン(William A. Houghton, 1852-1917)をまず取り上げ、最後にラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn, 1850-1904)、ジ

ジョン・ロレンス(John Lawrence,1850-1916)、エドワード・ブラムウェル・クラーク(Edwar Bramwell Clarke, 1874-1934)の3名について言及している。川戸道昭『明治のシェイクスピア』(2004)でもジェームズ・サマーズとウィリアム・A・ホートンは大きく取り上げている。

[1] エドワード・Howard・ハウス

エドワード・Howard・ハウスは紙幣の彫版職人の父、ピアノに才能のある母のもと、ボストンで生まれた。1854年にボストン・クリエール紙の演劇批評を担当、その後1858年にはニューヨーク・トリビューン紙の演劇評論を担当し、奴隷廃止運動の通信員となった。当時は南北戦争(1861-1865)もあり、ジャーナリストとして活躍した。日本との関わりは、1860年に咸臨丸がサンフランシスコ到着し、以後この日本使節団の取材を行ったことがある。1869年には特別通信員として日本へ派遣されている。1871年には大学南校(のちの東京大学)で英語を教授している。⁽¹⁴⁾

ハウスの多才振りについては以下のように指摘されている。

明治二年来日し、新聞記者として、大学教師として、評論家として、更に異色ある芸術家として記憶されているエドワード・Howard・ハウス(Edward Howard House)はわが国明治初年の政治、文化に貢献するところ多く、外交問題、条約改正ではわが国に有利な道を開き、或はわが国としてははじめての西洋音楽、オーケストラの演奏を指導するなどその業績は多方面にわたっている。⁽¹⁵⁾

概ねハウスについては日本における外国人英語教授者として高く評価されている。

ハウスは主に、文典、作文、習字、書取、読方、歴史を教えていた。そしてこれがわが国に於ける正則の英語教授の発端であるといわれている。すなわち、在来の英語学習は概ね変則でいわば眼で見る英語であったが、ハウスによって耳で聞く英語が習得されるようになったのである。

ハウスは当時来日していた外人中でも、教養の点で特に傑出していて、英語、英文学に就ての深い素養のある、しかも厳格な教師だったと云う。⁽¹⁶⁾

〔2〕ジェームズ・サマーズ

ジェームズ・サマーズは日本における高等教育でイギリス文学の講義を行った先駆者である。重久篤太郎『日本近世英学史』（1941）によれば、サマーズ以前には前述のハウスの存在もあるが、短期間であったため、サマーズを高く評価している。

わが国に於いて英吉利の文学作品が直接に原文から読まれ且つ組織だつた研究が始められたのは明治以後のことであるが、資料を整へ文献に徴せば最初に英吉利文学の講筵を開いた人は英人 James Summers であると考へられる。彼は未だ學制の十分に整はなかつた明治初年に開成學校の英文學教師となり、又札幌農學校で英文學を擔當した謂はゞわが國の英吉利文學研究の開拓者である。⁽¹⁷⁾

さらにサマーズは日本のシェイクスピア研究という点でも注目すべきである。

Summers の Shakespeare の講義のことは英文「明治八年東京開

成学校一覧」に録した試験問題中に見えた Hamlet からの十数行の抜粋によって知られるが、これは Summers が Houghton 以前に日本に於いて Shakespeare 研究を始めた先駆者として敬仰すべき事跡を実証する具體的資料として費い。かくの如く Shakespeare 及び Milton の演習は Summers に始まり、その端緒は少なくとも明治七八年に認めることが出来る。⁽¹⁸⁾

もちろん、最初に「シェイクスピア劇を講じた英人」⁽¹⁹⁾でもあ
る。別の場所でも重久は英文「明治八年東京開成学校一覧」の重要
性を述べている。

これはサマーズが日本のシェイクスピアの先駆として敬仰さる
べき事蹟を實証する具體的資料である。⁽²⁰⁾

サマーズの功績は教育者として日本のシェイクスピア研究者を育
成したことも忘れることはできない。

開成学校の時代の Summers の講筵に連つた学生の中には山崎
為徳、船越哲次（後の井上博士）、岡倉角蔵（後に覚三）、和田
垣謙三の諸氏の名が見えてゐることは興味深く感ぜられる所で
あり...⁽²¹⁾

サマーズはどのような教育方針であつたか。川戸道昭『明治のシ
ェイクスピア』(2004)によれば、朗読（エロキューション）中心の
授業であつた。

彼が『ハムレット』を取り上げる主眼は、それを一篇の演劇作
品として読むことよりは、そこから抜き出した台詞の一部を生

徒に「くりかえし朗読」させ、それによって、大作家の模範文に親ませ、「英語の精髓ともいうべきリズム」を体得させるというところにおかれていた。そのことは先の試験問題中にみえる、「ハムレットが父の亡霊に呼び掛ける台詞を一〇行引用し、そのうちの数行をパラフレーズせよ」という質問からも推察できる。このような問題は、基本となる文章の朗読・暗誦を前提としてはじめて成立する問題ということができるのである。

(22)

サマーズの教授法をサマーズ自身から坪内自身が体験することはなかったが、坪内が後年、「読法を興さんとする趣意」(1891)をはじめ、朗読に注目したことを考えると、興味深い事実である。

〔3〕ウィリアム・A・ホートン

ウィリアム・A・ホートンは坪内逍遙が開成学校時代にシェイクスピアを習ったことでも知られている。重久篤太郎『日本近世学史』(1941)によればホートンはサマーズの後任であり、わが国における英文学の理解が深ったまった貢献者であるという。⁽²³⁾特にホートンのHamletで「王妃ガーツルードの性格を評せよ」という問題に対して、逍遙は東洋流に解釈して王妃の行為を道徳的に評してしまった。逍遙は「回憶漫談」(1925)の中で次のように述べている。

文学部といつても、当時の政治、経済が主で、西洋歴史、哲学史、国文、漢文等で時間が大部分充たされ、英文学はたかゞ六時間位のみであつたらう。英文学はホートンといふ紳士の教授の受持で、チャーサーやスペンサーやミルトン、シェークスピア

ヤを主として講じた。学殖は豊富らしかつたが、講義振りは純然たる学究だつた上に、眠たい、低い調子でポツリポツリ、而も私にはやつと六七分通りしかわからない英語で講じたのだから、課目には同情を持ちながら、なまけ者の私などは余り裨益する所がなかつた。シェークスピアの「ハムレット」の試験に王妃ガーツルードのキャラクターの解剖を命ぜられて、初めての時には其意味が解りかね、「性格を評せよ」といふのだからと、主として道義評をして、わるい点を付けられ、それに懲りて、図書館を漁り、はじめて西洋小説の評論を読み出した。

(24)

逍遙はこれを契機に英書の文学論や評論を積極的に読み込み、東西文学の比較するようになった。⁽²⁵⁾ 逍遙はこの試験の結果第3学年に不合格となり、給費生資格を失つたとされる。⁽²⁶⁾ 前述の通りサマーズとホートンについてはその功績が高く評価されている。

明治六、七年の交からは同十五年に至る十年間の啓蒙期或ひは草創期の英文学研究に寄興せる James Summers 並びに William Houghton の二人の業績は、日本英文学発達史上に顕彰するに足るものであり、殊にかれらが當代の國文学界に刺激乃至感化を與へるところがあつた事蹟は日本文学史の側からみても閑却することができない。⁽²⁷⁾

ホートン以前に前任者のサマーズもいたが、竹村覚『日本英学発達史』(1933)ではサマーズの存在を知つた上でホートンについて次のように述べている。

教授の最も大きな功績としては、先ず何よりも本邦に於てはじめて正式に Shakespeare を講義し、今日の盛な Shakespeare 研究熱を招来した點を挙げなければならない。(28)

竹村はホートン教授が輩出した日本のシェイクスピア学者についても言及している。

恩師 Houghton 教授と共に、我国 Shakespeare 研究史に、永く功績をたたへられるべきものは、和田垣、井上、高田、坪内の四博士で、和田垣博士は漢文譯「李王」(King Lear) (明治十二年)の譯者として、井上博士は「新體詩抄」(明治十五年)の撰者として、高田博士は邦人最初の講義者として、坪内博士は我日本が生んだ世界的 Shakespearean として、不滅の存在である。そしてこれらの名前と功勞は、Shakespeare が日本から消え去らない限り、末永く記憶せらるべき性質のものである。(29)

明治期における外国人教員の役割は教え子達の活躍とも密接に結びついているが、以降は斉藤昌三「御雇外国人一覽」(1872)、重久篤太郎「附録 東京帝国大学備外国人英語・英文学教師名簿」(1941)などを特に参考にした。

[4] ラフカディオ・ハーン

ラフカディオ・ハーンは小泉八雲の名でも知られているが、日本に帰化したこともあり、外国人教師としての取扱いについては研究書によってもかなり差がある。Toyoda Minoru. *Shakespeare in Japan* (1940)でもその取扱いは言及に過ぎない。同じように「東京帝国大学備外国人教師講師名簿」からも除外されている。ハーン

については別の機会に取り上げることとしたい。

〔5〕ジョン・ロレンス

ジョン・ロレンスは重久篤太郎『日本近世英学史』(1941)によれば、東京帝国大学には1906年9月に招聘され、英語やイギリス文学を教授した。彼はロンドン大学で古文学に関する修士号を取得し、さらにオックスフォード大学でも修士号を取得している。その間、ロンドン大学、ドイツ大学でも教鞭を執り、学問への志を強く持った人物である。⁽³⁰⁾

〔6〕エドワード・ブラムウェル・クラーク

エドワード・ブラムウェル・クラークは田中銀之助(1873-1935)と共に日本にラグビーを伝えた人物としても知られている。クラークはイギリス人の両親のもと横浜市に生まれた。ラフカディオ・ハーンより作文の指導を受けるなど日本との浅からぬ縁の持ち主である。母国のケンブリッジ大学への留学ではイギリス文学を専攻し、ラグビーにも打ち込み、帰国後には日本のラグビー導入に献身的な役割を果たした。慶應義塾大学では英語教員として勤務し、後年は上田敏(1874-1916)の後任として京都帝国大学の教壇に立ち、イギリス文学、特にシェイクスピアを講義したことも知られている。

エピローグ

現在のように留学が容易にできる時代ではない頃は、外国人教員の招聘は大きな意味を持っていたことは言うまでもないことで

ある。外国人教員に期待されることは英語での講義である。サマーズが実演した朗読などは活字だけでは学び取ることはきわめて困難であろう。実演を伴うものは直接外国人教員から学びこと、すなわち正則であることが何よりである。現在の英語教育においてはそれがコミュニケーションという言葉で片付けられているが、英語のリズムなどを重視しようという教育はなかなか実現していない。⁽³¹⁾

参考文献

- Brander Matthews and Laurence Hutton. *The Life and Art of Edwin Booth and His Contemporaries* (Boston: L.C. Page, 1907)
(BiblioLife ILC, 2007)
- William Winter. *Life and Art of Edwin Booth* (Macmillan and Co., 1893)

テキスト

- Stanley Wells, Gray Taylor, John Jowett, and William Montgomery, editors. *William Shakespeare: The Complete Works*. (Oxford, Oxford University Press, 1986)

翻訳

- 小田島雄志訳『冬物語』（シェイクスピア全集 14、白水社、1983年 10月）
- 小田島雄志訳『ヴェニスの商人』（シェイクスピア全集 35、白水社、1983年 10月）

注

- (1) 竹村覚『日本英学発達史』（岩波書店、1933年 9月）、p.218.

- (2) 石塚倫子『『ハムレット』と日本人 翻訳・翻案・純文学を通して』（青山誠子編『ハムレット』ミネルヴァ書房、2006年2月）、p.147.
- (3) Niki Hisae. *Shakespeare Translation in Japanese Culture* (Kenseisha, 1984), p.12.
- (4) Kawachi Yoshiko. “Shakespeare in Japan” (『杏林大学外国語学部紀要』第1号、杏林大学外国語学部、1989年3月)、p.3.
- (5) 南隆太「シェイクスピアと日本」(日本シェイクスピア協会編『新編シェイクスピア案内』研究社、2007年7月)、p.191.
- (6) 川戸道昭『明治のシェイクスピア』(明治のシェイクスピア<<総集編>>1)(大空社、2004年5月)、p.13.
- (7) Ibid., p.14.
- (8) Ibid., p.89.
- (9) 「東京大学の歴史」
(http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/b03_02_j.html) (2011年12月25日アクセス)
- (10) 鈴木貞美『日本の「文学」概念』(作品社、1998年10月)、pp.179-190
- (11) 「日本最初の博士号」
(http://meiji.sakanouenokumo.jp/blog/archives/2009/05/post_3.html) (2011年12月25日アクセス)
- (12) Toyoda, Minoru. *Shakespeare in Japan*. (Tokyo: The Iwanami Shoten, 1940), p.23.
- (13) 重久篤太郎『日本近世英学史』(教育図書、1941年10月)、p.375.
- (14) 不動岳志「明治人物ファイル E・H・ハウス(1836~1901年)」
(<http://www.ofko.jp/mimigaku/miejijinbutsu/meiji-fl.htm>)

(2011年5月9日)

- (15) 「E.H.ハウス」(昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第5巻、昭和女子大学近代文学研究所、1972年3月)、p.380.
- (16) Ibid., p.397.
- (17) 重久篤太郎『日本近世英学史』、p.315.
- (18) Ibid., p.322
- (19) Ibid., p.342.
- (20) Ibid., p.357.
- (21) Ibid., p.323.
- (22) 川戸道昭『明治のシェイクスピア』、p.95.
- (23) 重久篤太郎『日本近世英学史』、pp.315-316/
- (24) 坪内逍遙「回億漫談」(『早稲田文学』第233号、東京堂、1925年7月)、p.5.
- (25) 大村弘毅『坪内逍遙』(新装版)(吉川弘文館、1987年12月)、pp.41-42.
- (26) 坪内逍遙とホートンについては拙稿「異文化理解から見た明治時代のシェイクスピア受容の一考察—坪内逍遙を中心に—」(『武蔵野学院大学大学院研究紀要』第2輯、2009年4月)でも触れた。
- (27) 重久篤太郎『日本近世英学史』、p.316
- (28) 竹村覚『日本英学発達史』、p.216.
- (29) Ibid., p.217.
- (30) 重久篤太郎『日本近世英学史』、pp.394-398.
- (31) 清水英之『英語発音とシェイクスピア～作品を原語で朗読したい人たちへ』(小鳥遊書房、2024年7月)では実際に英語朗読を大学の授業等で取り上げた実践例も紹介されている。

【キーワード】シェイクスピア、外国人教員、英語教育、朗読